
冬の貴婦人

zero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の貴婦人

【Nコード】

N7267P

【作者名】

zero

【あらすじ】

人はそれに何故言葉をつけたのか。誰がつけ始めたのか、誰がつけたのかはわからない。そこに込められているものは、願いか、希望か……。それとも……。

連載している「get back」の少し前のお話です。

太陽がその姿を見せる時間もすっかり少なくなった12月初旬。すでに陽は傾きはじめ、時折冷たい風が頬を刺し、陽が沈むにつれて気温が低くなるのが感じられる。風の強さを示すかのように白い雲はどんどん流れていく。

土曜日の流れの速い人通りのなかで、灰原哀はひとりで米花町をゆつくりとした歩調で歩いていた。だが特に用事や目的があるわけではない。ただもう一度この眼にしっかりと焼き付けておきたかったのだ。たぶん、こうしてこの街を歩く事も、緩やか時間を過ごす事は、もう無い。

哀は目についた店を一軒一軒立ち止まり眺め、時には中に入る。無論小学生の子供が一人で入っても問題ないような雑貨屋などに限るが。

どこに行く時も子供達と一緒にだった。そうして思い返せば何故かいつも事件に巻き込まれていたような気がして苦笑する。

例えば、工藤新一を頼ってこの街に来た時はこんなにも穏やかなときを進むとは思ってもなかった。本来の姿では経験できなかった、かけがえのない大切な時間。今はもういない姉と過ごした時間と同じくらいに。それは彼にしては違いかもしれないが、彼女にとってはそのものだ。それはなんて自分勝手な考え。でもそれを否定したくはなかった。大切だと思う気持ちは、確かに本当だから。

人通りが先ほどよりも増えてきた。

哀は通行人の邪魔にならないように、道路とは反対側の歩道の端に移動した。そこで気がついたのだが、ビルの向こうに見える空はすっかり茜色で、しばらくすると暗くなってしまうことがわかる。

（そろそろ帰らないと）

居候させてもらっている阿笠博士の家で昼食をとった後、そう時間をおかずに、散歩に行く、と家を出てきたのだ。邪魔が入らないように携帯もおいてきていた。持っているのは帰りに夕食の買い物に行く為の財布だけ。

博士が心配しているかもしれない。

哀はマフラーをかけ直し、前を見据え、帰途への道を辿り始める。まるで自分の家のように。そして当然のように迎え入れてくれるひとがいる。

（こうやって博士の家に帰るのも、そう多くないわね……）

そう遠くない己の運命を考えながら歩いていると、小さなフラワーショップが目に入る。なんとなく立ち止まり、膝に手を置き眺めた。

エリカ	シクラメン	パンジー	ノースポール	コス
モス	柊	水仙	寒椿	等々……。

他にもあまり耳にしたことのない名称札を下げている花たちが沢山ある。どの花も冬の寒さに負けることなく、色とりどりの花びらをその身に纏まとっている。

（綺麗ね）

赤、紫、桃、橙、淡緑、色合いよく並べられている。そしてその一角にある白い花に哀は目を奪われた。その白い花は名称札もなく、数も少ない。

「お嬢ちゃん、この子が気に入った？」

哀が顔をあげると、黒い髪の毛を後ろで束ね、淡いブルーのエプロンを着けている若い女性が微笑んでいた。そして哀が見ていた白い花を手にとると、哀の前にしゃがみ込む。

「このお花、名前はなんていうんだろうって思ったの」

「ああ、ごめんなさいね。この子はさっき入ってきたばかりなの。プレートをつけるの忘れてたわ」

女性は悪戯っぽく笑う。

「この子はね、クリスマスローズって言うの」

「クリスマス？」

クリスマスという名を冠しているという事はこの時期から咲き始めるのだろうか。だがそれにしては……。

「数が少ないのね」

「ウチは小さな店だからね」

哀が口にした疑問はかなり端的なものだったが、店員の女性はさほど考えることもなく小声で囁いた。他のお客にも同じ質問をされたのかもしれない。

「どうする？」

購入するかを訊いているのだろう。だが哀は興味本位に寄っただけだ。

哀が口を開きかけた時、別の人物の声で遮られた。

「すみません。そのお花見せてくれる」

「あ、はい。どーぞ」

哀が声のしてきた方を振り向くと、子連れの女性が立っていた。店員の女性は立ち上がり、その親子に近づいて手に持っていたクリスマスローズを差し出しながら説明を始めた。哀と喋っていた時とは違い、ちゃんとした口調だ。丁度いい。今のうちに帰ってしまおうか。哀が踵を返しそこから立ち去ろうとした時、二人の会話が耳に入ってきた。

「え、毒があるの？」

「はい。でも気をつけてもらえば大丈夫ですよ」

「うーん……でもウチにはこの通り小さい子もいるし、別のお花にするわ」

哀は振り向いてその親子を見る。確かに連れている子供は哀よりも幼かった。

「ありがとうございます」

店員の女性は綺麗な微笑みを浮かべながら、親子に向かって一礼し、小さく息を吐いた。

「お嬢ちゃんゴメンね。ほったらかしにしちゃって」

「いいの。それよりクリスマスローズっていくらするの？」

「え……。買ってくれるの？ でも、お嬢ちゃんも聞いてたでしょう？ 毒があるけど……。もちろんちゃんと気をつければ問題ないけど……」

「大丈夫、ちゃんと調べて注意するから。……それに――」

（めんどくせえ……）

両手にお菓子やジュースが詰め込まれているビニール袋をさげながら、江戸川コナンは若干ふてくされながらコンビニからでてきた。

（重いし……しかも寒いし……）

コナンは家を出てきてから何度目かわからない溜め息を吐きながら、毛利探偵事務所に向かって歩きだそうとした。だが見知った顔の人物が前から歩いてきたので思わず立ち止まる。彼女もコナンに気づいたようだ。逃げるのも癪なので、少し顔を逸らしながらコナンは哀が追いつくのを待った。

「よお……」

「ええ」

哀はコナンの顔と彼の持っているビニール袋を何度か見比べて、にこりと口元を緩めた。

「江戸川君はおつかいかしら？」

「あ、ああ……まあな」

「そうよね。まさかパシられたわけじゃあるまいし」

コナンは、うつ、と小さく唸り黙り込んだ。

（わかってんならいちいち訊くなよな……）

自然と二人は肩を並べながら歩きだす。

「それより、おまえは何持ってたよ」

コナンは哀が持っている黒いビニール袋を顎で指してみせた。

「お花」

「花あ？」

コナンは少し体を寄せて袋の中を覗き込む。

「これ、なんて花？」

「クリスマスローズっていうらしいわ」

「ふーん。でもなんだって花なんか？」

「別に何だっていいでしょ。それとも、私がお花を買っちゃいけないのかしら」

「なっ……んなこと言ってねーだろ。おまえはなんでそんな風にしか言えねーんだよ」

「悪かったわね。無愛想で」

「……………」

いつも通りの口喧嘩だが、コナンには哀の心を推し量れなかった。どういう気持ちで花を買ったのか。そこに何か意味はあるのか。普段のコナンならそんなことでもないのだが、数日後の事を思うとやはりいくらか考えさせられる。

「工藤君？」

「うえ。な、なんだ」

哀は無言で前を指差す。いつの間にか別れ道まできていた。

「じゃあね、工藤君」

「あ、ああ。またな」

哀は空いている方の手を軽く振ると、住宅が並び立つ路地に消えていった。

「ただいまー」

「おそーい！ あんたどこで油うつてたのよ！」

コナンが探偵事務所に入ると、鈴木園子はソファから少し身を乗り出してコナンを睨んだ。

「コナン君、外は寒かったでしょ？ 今お茶淹れるね」

園子の隣に座っていた毛利蘭は、立ち上がってお茶を淹れに立つ。コナンはソファの前にあるテーブルにお菓子が入った袋をドサリと置くと、園子の向かい側のソファに腰掛けた。部屋の中を見回すと探偵事務所を出る前にはいたはずの人物が見あたらない。

「おじさんは？」

「おじさまなら飲みにくって出て行ったわよ」

園子は袋の中からスナック菓子を取り出しながら答えた。

（ハッ……あのオヤジ……）

コナンは少々呆れつついつも毛利小五郎が座っている机を見やった。そこで見慣れないものがあることに気づく。

「あれなに？」

コナンは机の上にあった綺麗に包装されている花を指差して園子に問いかける。

「んー？ ああ、あれは……」

「コナン君が出て行ってる間に、前にお父さんに依頼してきた人がお礼に来たの。その人がくれたんだ」

蘭がお茶の入った湯呑みをコナンの前に置きながら、園子の言葉を受け継ぐ。

「ふーん……」

コナンはお茶には口をつけず、机の傍まで歩み寄りその花を眺めてみる。

（これって……）

「クリスマスローズ？」

「コナン君知ってるの？」

「なに、またテレビでやってたとか？」

「あはは……まあ」

コナンは適当に相槌をしながらもう一度その花を一瞥する。哀が持っていたものよりかなり大きいが、少し俯くように花を咲かしているそれは、確かに先ほどみたクリスマスローズ。コナンがしっかり見ようとクリスマスローズに手を伸ばしかけた時、蘭が慌てたように声を発した。

「あつ、気をつけてね。毒があるらしいから」

「毒？」

コナンは蘭の方に振り向き、少し眉を寄せる。

毒といってもそんなに危険なものではなく、樹脂に触れたり直接口にしたりしない限り問題ない。だが小さい子供やペットがいる場合は少々気をつけてほしい、と説明された事を蘭はコナンに話した。

「でもわざわざ毒のある花をくれなくてもねえ」

園子は少し首を傾げながら軽口を叩いた。もちろん悪意があるようなものではないが。

「もう、ダメよ園子。そんなこと言っちゃ」

「へへ、ゴメンゴメン」

「それに……」

蘭は一端言葉を切り、クリスマスローズに視線を移した。

「毒があるからって、あの花に罪はないじゃない。その毒も自分を何かから守る為に仕方なく身につけたものかもしれない……。毒があるからって敬遠したら可哀想じゃない？」

なんだか少ししんみりした空気なってしまった。

「そうだね……ごめん、蘭」

「え？　そ、そんな改めて謝らなくても……」

口ごもっている蘭に園子はニヤリと笑った。

「へへ、わざとだよ」

「ええ？　ちよっと園子……！」

談笑している二人を尻目に、コナンの表情は硬かった。

「……ボク、ちょっとやることあるから上に行ってるね」

「あ、うん。晩御飯はいつもの時間にちゃんと作るからね」

「うん、わかったよ」

コナンはソファの後ろを回り、事務所の扉に向かって歩き出す。

「ちょっとガキンちょ」

「な、なに？」

また面倒を頼まれるのだろうか。少し警戒しながらコナンは振り向いた。すると園子は袋にお菓子を数個分けコナンに差し出した。

「はい、お駄賃ね」

「え？」

「ま、ジャンケンに負けたあんたが悪いんだけど、特別に恵んであげるわ」

「ハハ……ありがとう園子姉ちゃん」

おう、感謝しなさい、とふんぞり返っている園子に、コナンは苦笑を浮かべながらそくさと事務所の扉を開けた。

コナンはジャケットを脱いでから、居間にあるこたつに潜り込んだ。冷えていた身体が徐々に体温を取り戻す。

「自分を何かから守る為、か……」

悪かったわね。無愛想で。

(あいつ……いや、関係ないだろ……)

園子に貰ったお菓子を食べる気にもならず、コナンはどこか落ち着かなかった。しばらくぼーっと寝転がっていたが、おもむろに携帯を取り戻す。

ネットで検索をかけると、クリスマスローズに関する項目はかなりあった。

冬の貴婦人ともいわれるクリスマスローズは、いくつか種類があった。全部をひっくるめてクリスマスローズというらしい。その名の通りクリスマス前後の時期に咲き始めるものと思われたが、多くの品種は1月から春にかけてが開花時期らしい。そしてクリスマスの頃に咲き始めるものの一つがヘレボルス・ニゲルといわれるもので、おそらく哀が持っていたものと小五郎が貰ったものがこれにある。

helleborus niger

ギリシャ語で、helleinが殺す。borasが植物。nigerは根の部分の色が『黒』だからということから。合わせて『殺す植物』。何故そんな物騒な名前がつけられているのかというと、やはり毒を有するかららしい。昔はそれから薬を作っていたこともあるが、現在ではまず無いとのこと。

(……黒、か)

コナンは胸に奇妙なざわつきを感じながら、画面をスクロールさせていく。するとクリスマスローズの花言葉が幾つか表示された。

誹謗、中傷、中毒、発狂、悪評、スキャンダル。

…… なんていうか。余り気分のいいものではない。だがさらに画面を下にスクロールさせた時、コナンは閉口した。

追憶、慰め、私の不安を取り除いてください、私を安心させて。

そして、最後に記されていた文章にコナンは眼を見開いた。

「じゃあね、工藤君」

コナンは気がつくと、スケボーを片手に転がるように階段を駆け下りていた。放り出すようにスケボーを歩道に投げてその上に飛び乗る。

（あのバカ…… まさか！）

寒空の中で加速するスケボーは、寒さを通り越して痛い程だがコナンにはどうでもよかった。

哀は以前、ベルモット対峙した時に後をつけてきたことがあった。だとすればあの時の逆で、自分を出し抜いて予定を早めたとも考えられる。

博士の家はスケボーを飛ばせばものの数分でつくはずなのに、や

たらと長い時間に感じる。今日に限って人が多いのは気のせいか。何故いつもより信号に引つかかる。事務所を出る時から哀の携帯に電話をかけているが繋がらない。

見慣れた白い家がコナンの視界に入る。コナンは博士の家の門の前でスケボーを飛び降りると、乱暴に門扉を押し開けインターホンも鳴らさずに玄関の扉を開けた。そこには驚いた表情の博士。

「おお、どうしたんじゃ、しんい……」
「灰原ア！」

コナンは思わず大声で叫んでいた。

「……なんじゃ、哀君がどうかしたのか？」

焦った様子のコナンに博士は目を丸くして問いかけた。

「どうかしたのかじゃねーよ！ 灰原が……！」
「なによ、うるさいわね」
「……………へ？」

背後から聞こえてきた方を振り向くと、そこには小さなシャベルとスケボーを持った哀が立っていた。

「哀君、いい場所があったかね？」
「ええ、でもよかったの？ 庭に埋めて？」

哀はシャベルとスケボーを下駄箱に立てかけると、靴を脱いでコナンの横を悠々と通り過ぎていく。

「かまわんよ。せつかくある庭なんじゃからな」

「悪いわね。急に花なんか買ってきて」

哀はキッチンに入り手を洗いだした。そしてカウンター越しにコナンを見る。

「それで、何か用？」

未だ玄関で突っ立っているコナンは、はつとして口を開きかけたが何を言っているかわからない。コナンが言葉を探しているうちに、手を洗い終えた哀が近づいてきた。

「ねえ、なんなのよ。そんな格好で、何かあったの？」

「え……？」

コナンは自分の身体を見下ろすと上着を着てくるのを忘れていたことに気がついた。

「……なんでもねーよ」

「はあ？」

コナンは靴を脱ぐとズカズカと家の中に入り込み、ソファに座ってうなだれた。哀は一瞬呆気にとられたが、すぐに顔をしかめてコナンの前に歩み寄る。

「ちょっと、工藤君」

「なんでもねーって……」

「じゃあ何しにきたのよ？」

コナンは質問には答えずソファに寝転がり、哀に背中を向けた。コ

ナンのその態度に、哀は少し腰を曲げて真剣に訊いてみる。

「ねえ、本当にどうしたの？」

「なんでもねーつつつてんだろ。ちょっとほつといてくれよ」

コナンの意味不明の行動に哀は眉をひそめながら博士に目配せする。
だが博士もキョトンと首を傾げるだけだった。

「ほつといってくれて……もう時間も遅いし、早く帰ったほうがいいんじゃない？」

「……………」

「泊まるの？」

「……………」

「……あつそ、じゃあ夕飯はいらないのね？」

「……………いる」

「……………」

（まったく……なんなのかしら？）

哀はしばらくコナンを見下ろしていたが、そこから動く気配のない彼に大きな溜め息を一つ吐くと、キッチンへと姿を消した。博士もコナンの行動を理解できなかったが、こういう時は放っておくべきだと思い声をかけなかった。長年コナンと付き合ってきた。対処の方法も十分心得ていた。

博士はソファではなくパソコンデスクにある椅子に座る。そこからは大きなガラス窓を通して庭が見渡せ、そこには今までなかった白く小さな花。直射日光の当たらない日陰に植えられているが、部屋の中からちゃんと見える場所にあるクリスマスローズは、まるで何かを訴えているようだった。

私を忘れないで、と……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7267p/>

冬の貴婦人

2011年11月13日16時11分発行